
手は届かず

syou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手は届かず

【Nコード】

N3494V

【作者名】

SYOU

【あらすじ】

仙人掌の夢をよく見る『私』は、愛しの立間と車内で二人きりになる。《セピアワールド》二作目。

*注）当作品はR-15指定となっております。

檻の中にいる仙人掌の夢をよく見る。

鉄格子の中にいる、孤独な仙人掌。

棘だらけのそれは、徐々に育っていく。

そして、緑色の体に白い唇のような花をつける。

動けない仙人掌は、外に出たいと言い出す。だが出れるわけもなく、無残に枯れていく。

褪せていく白。「出して！」と何度も叫ぶが、その思いも空しく花は鉄格子の床に落ちる。

いつもそこで目が覚める。まったく、寝覚めの悪い夢だ。そして、溜息をついてからいつも気づく。

あの声を、どこかで聞いたことがあると。

「眠い？」立間さんたちまが、前方を見ながら私に声をかけた。

「いえいえ、大丈夫です」と私は欠伸を噛み殺しながらそう言った。

「眠かったら寝ててもいいからな」車を左折させる為、立間さんはハンドルを左に回していく。その時、左手の薬指に嵌はまっている銀色のリングが光った。確かそのリングは、二個下の彼女さんとお揃いの物とか言う奴だったはずだ。その彼女さんとは付き合ってもう三年になるらしい。今、立間さんは大学三年なので、逆算すると高校三年の時に彼女さんと付き合い始めたことになる。親も公認というのだから、私が入れる隙なんて無い。心の中で溜息をついた。

赤信号で車が止まる。ウインカーの音が、車内に大きく響く。

ハンドルを掴んでいる彼の右手の人差し指の絆創膏に目が行く。確か立間さんの話では、仙人掌の棘が刺さったからということらしい。さつき車内で「だから仙人掌は嫌いなんだよね」と苦い顔をしていた。

「もう、気分は大丈夫か？」

そう言われ、私は先程倒れた時にぶつけた額の部分を触る。まだ痛みは少し残っている。

「あれはびっくりしたな。いきなり倒れてさ」

「私もびっくりでしたよ。気づいたらみんなが私を取り囲んでいるんですもん」

今日私たちのサークル『対人コミュニケーション考察同好会』

通称『TKK』は、『山登りに於ける人間関係の変動への考察』という活動をしに黄迅山おうじんさんへ来ていた。まあそんなのは名ばかりで、結局は男女で楽しくお喋りをしながら山登りをしようという、所謂合コンの様なものだ。

立間さんが参加する、という情報を耳にし私もその合コンに参加する事にした。どうせ叶わない恋だと分かっているけど、やっぱり好きな人の近くにはいたい。

本当は、今日は立間さんと色々喋るつもりだった。だが、山に登り始めてから十分ほどで私は倒れてしまった。理由は貧血。この頃レポートが続いていて、あまり寝ていないからだろうか。少し気分も悪いという事で、立間さんに家まで送ってもらう事になった。そういう経緯があつて、今に至る。

よく考えると、今立間さんと二人きりだ。ふと、私はその重大な事実が気がつく。顔が熱くなり、心拍が加速する。ちらりと車のサイドミラーを伺うと、耳まで真っ赤になっていた。恥ずかしさの余り、私は目を閉じる。

寝たふりをしよう。きつと、ふりをしている内に寝てしまふはず。

私は羊を数えることにした。

羊が一匹。

寝てしまえば顔色も元に戻るはず。うん、早く寝るんだ私。

羊が二匹。

でも、立間さんと喋りたい。乙女の恋心が、私の眠りを妨げる。

羊が三匹。

真っ赤になつた顔を見られるのは流石に恥ずかしい。スッピンを

見られる事並みに恥ずかしい。心の天秤は揺れ続ける。

羊が四匹。

上下の感覚が狂い、まどろみに浸る感覚。

鉄格子の中、孤独の仙人掌が叫んでいる。いつもの夢だ。

「出して！ 出して！」

悲痛な声が聞こえ、私は目を覚ます。勢い良く起き上がった所為で、シートベルトが私の体の動きを抑制する。

また、あの夢か。私は深く溜息をつく。

そこで私は一つの違和感に気づく。車の走っている音が聞こえない。

外を、見た。

褪せた世界、動くのを止めた景色。手を上げて横断歩道を渡る少年。歩行者通行止めの標識。騒がしい街の音は皆無。まるで、やってくる何かに怯えているかの如く。

何だ、これは。思考は褪せた景色に追いつかず、ショートしそうになる。

とりあえず、立間さんに相談しよう。私はパンクしそうな思考回路の中で考え付いた最善の策を実行に移すことにした。

「立間さん！」

運転席を、見た。

見開いたままの目、微動だにしないハンドルを握る手。

彼もまた、止まっていた。

瞬きを三回する。動きを止めたままの、先程と変わらない世界。

これは夢なのか？ 夢じゃないのか？

だが、どちらにしろ彼と二人きりだという事に変わりはない。引いていた顔の熱さが、戻ってくる。

ちらり、と彼の顔を伺う。誠実な顔つきに少し茶色がかった黒の短髪がよく似合っていて、格好良い。

どくと心臓が鳴り、一つの考えが私の頭を過ぎる。

このまま、彼の唇を奪えるんじゃないのか。

緊張の余り、唾を飲み込む。そして周りを見渡す。誰も、こちらを見ていない。というより、むしろ誰も動いていない。

シートベルトを恐る恐る外す。ここで大きな音を立てて立間さんが動き出したら、折角のチャンスが台無しだ。

彼の左肩に右手をかける。がっしりとしている。そしてその右手は、彼の髪の毛へと伸びて行く。まるで、磁石に引き寄せられるように。

左脚で彼の左脚をまたぐ。彼の左太腿に私の全体重をかけた。その時私は、思いの他下着が濡れている事を知った。

左手を彼の背中に回し、胸に顔を埋める。彼の香り。ずっと、このままでいたい。

彼で蕩けた体が我俣を言い出す。「早く、早く」と。

そんなことはわかっている。私は舌なめずりをして、目的の場所へ顔を近づけて行く。

加速し続ける鼓動。もう、我慢できない。左手を彼の右肩にかけて、一気に顔を近づけた。

接近する二つの唇。興奮に震える身体。目まぐるしく体内を駆ける心拍。真っ白になりそうな思考。

感覚、触れた。飛びそうな頭の中で、それが急に姿を現した。

甘く、熱いものが内でたぎる。もっと、欲しい。

渴いた喉が水を欲すように、二酸化炭素で満たされた肺が酸素を欲すように、今の私は生きる為に彼の唇を欲していた。

貪る、貪る、貪る。

こんなんじゃない、足りない。

駄々をこねる舌を口の中へ滑り込ませる。彼の体へ侵食する、至福の一時。

火照る体。私は彼の舌を感じながら、ワイシャツのボタンを一つずつ外していく。内に秘めた欲望が「出して！ 出して！」と叫んでいる。

ふとそこで、その声をどこかで聞いたことがあると気づいた。けど、それは私の淫らな思考回路によって隅へ追いやられる。

ワイシャツのボタンが、全て外れる。「始めましょうか」と彼の耳元で囁き、私は唇を重ねた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3494v/>

手は届かず

2011年7月31日03時19分発行